文芸読本　吉田精一編

西鶴

河出書房新社

読本精一編

西鶴

Kawade Paperbacks 21

文芸読本 西鶴

装幀者 原 弘 (NDC)

昭和37年12月20日 初版印刷
昭和37年12月25日 初版発行

定価 280円

編者 吉田精一
発行者 河出孝雄
印刷者 中内佐光

発行所 東京都千代田区神田小川町3の8 株式会社 河出書房新社
電話 東京(291) 3721～7
振替口座 東京 10802

©1962

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

文芸読本西鶴　目次

西鶴、人と生涯——吉田精一——1

■作品

好色五人女——武田麟太郎訳——17
好色一代女——丹羽文雄訳——72
世間胸算用——尾崎一雄訳——138
西鶴置土産——麻生磯次訳177

万の文反古——麻生磯次訳——217

■作家論・作品論・随想

西鶴小論——田山花袋——260

西鶴について——正宗白鳥——263

西鶴の鑑賞——佐藤春夫——280

西鶴町人物雑感——武田麟太郎——286

西鶴雑感——丹羽文雄——293

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

西鶴の文章――織田作之助――298

■研究課題

西鶴研究の現段階と今後の問題――吉田精一――306

■作品解説――309

■座談会

西鶴よもやまばなし――322

円地文子・中村真一郎・吉行淳之介・吉田精一（司会）

■文献目録――340

■年譜――341

西鶴、人と生涯

吉田精一

○まえがき

西鶴は紫式部とともに、日本最大の小説家である。紫式部が長篇の方の代表選手ならば、西鶴は短篇作家のピカ一である。形は長篇のようだが、内容は短篇の集合体なのが西鶴の文学である。

西鶴の作品は、好色物、武家物、町人物、雑話物と大別されるが、ここではその中でもっとも特色のあるものとして、好色物と町人物の代表作、それに遺稿の「置土産」と「文反古」をえらんだ。出世作の「一代男」はとりたかったが、ページ数の関係ではぶいた。「一代女」と「五人女」は「一代男」以上の傑作である。

町人物の最傑作は「胸算用」で、これははずせない。「文反古」は手紙体の変った形式で、珍らしいからぜひとりたい。

以上のような理由で、この五篇の現代語訳をえらんだのである。

西鶴の文学はもちろん現代にも十分通じる普遍性をもってはいるが、何といっても十七世紀の作家だ。どういう時代に生きたか。その時代と作品との関係はどうか、ということの説明を要する。それから西鶴がどうして西鶴となったかも知っていた方が、作品を理解する上に都合がよい。

そこで、先ず彼の生きた時代環境や社会、俳諧師としての西鶴を説明し、それを前提にして、西鶴とともに、読者にも小説にふみ入ってもらうことにした。そして、ここにはとれなかった作品は、かんたんに解説して、その妙味だけでも、味わってもらうことにしたのである。

○西鶴の生きた時代――新興町人――

西鶴の生きた時代は、そのまま大阪経済、大阪町人の発展の歴史である。西鶴自身商人であったし、その作品の中に当時の町人の姿が数多く描かれている。だから西鶴の作品に接する場合には、その前に一応当時の町人のあり方を概観しておいた方がよい。

寛文十年（一六七〇）――西鶴二十八歳、大阪十人両替の制度が確立され、同十一年三都飛脚制度、同十二年河村瑞軒による日本一周航路の設定など、大阪を中心とする経済組織ができあがり、ほぼ全国各地の物資が大阪に集中することになった。今その詳細は省くが大阪に入った主要産物には実綿から米、菜種、紙、材木、鉄、銅、蠟、藍玉、煙草、海産物等、産地は出羽、陸奥等奥州から、薩摩、日向等の九州の果にまで及んでいる。ことに米は、各地の大名が大阪に蔵屋敷という出張所を設け、此処で、金銭に替えた。したがって相場が立つようになった。このように大阪は全国各地の諸物産の総合的な集積地であり、供給地ともなったので各種の問屋、両替商、蔵元、廻船業等基幹的な商人層が形成され、その地の実質的な支配権を握り、やがて在来の領主経済に寄生した門閥商人にとって代ったのである。門閥商人とは大体が武士およびその縁辺の出で、領主と結んで、各藩の生産物を一手に握っていた階層であった。こうして、経済の動きが全国的規模に拡大され、商品も多様化し、農民生産物が直接に大阪に集中しだしたため、局地的な寄生経済の従来の型は当然崩れざるを得なかったのである。新しい経済の要求に応じて興った町人の典型の一つに両替商がある。当時江戸では主として金貨が通用し、大阪では物資の細かな出入、勘定のための銀貨が必要であった。この両都の通貨上の差や、金、銀、銭の三貨の単位がそれぞれ別だてで行われていた当時の貨幣制度、その上度々の改鋳で、各貨の通用価値が異る面倒な制度、慣習を円滑にするため貨幣の交換、銭相場の設定などを目的として、「両替商」なるものの発生をみた。先の「十人両替」はこれが制度化したもので、商品経済の媒介役として、直接商品には触れない金融機関である。経済活動が活発になればなる程、貨幣の往来も頻繁となり、したがって一層両替商の必要度はたかまる。だからそれは新しい経済社会のチャンピオン的存在ともなった。一方、商品が多様化し、集中度が高まるにつれて各種問屋も多くなり、これらの商人は積極的に産地にまで出向いて物資の独占、生産の管理を行うようになった。近江八幡出身の商人が近江地方の特産物である蚊帳を独占し、松阪出身の商人は綿栽培の費用の前貸を行って、生産物を自己の掌中に収めるなど商人は直接その手で農業経済をも支配するに至った。この結果、都市の階層構成（ことに大阪）が変化して、従来中核を成していた職人層に商人がとって代り、またさまざまの

産業に寄生する最下層の階級、借家層――日傭取、ボテ振、職人、奉公人――の数が急速に増大した。

新興町人層の拡大が頂点に達したのが元禄期であった。いうまでもなく各藩の領主経済は、その財源を米石のみに依存していた。ところが江戸初期から年々上昇の一途を辿った米の生産高が、元禄期に近づくにしたがってようやく停頓し、各藩の財政は急速に逼迫した。幕府財政も同様である。「生類憐みの令」などの悪政が重なって窮乏した幕府は、その穴を埋めるべく元禄八年（一六九五）の貨幣改鋳によって益金の拈出を狙った。これが一種のインフレーションを呼び、経済界が混乱、動揺した。これをきっかけとして町人層はすでに形成された組織の上に既得利権を擁護するための「株仲間」を作って安定をはかった。仲間の成立は早く承応年間（一六五〇年代）からおこっていたが、元禄期を迎えて、ようやく顕著になり、経済界は徐々に保守的体制に移っていった。再びいうならば、西鶴が、新興町人層とともに生涯を送ったというのは、以上の意味できわめて重要な意義をもっている。

○西鶴の一生と作品

本姓・生家・居所・号名

五十二年の西鶴の一生のうち、よくわからぬのは、出生から二十一歳で俳諧の点者になるまでの期間である。（西鶴の生涯についての実証的な研究は、野間光辰「西鶴年譜考証」に詳しい。）伊藤梅宇の「見聞談叢」に「摂の大阪津に平山藤五といふ町人あり」と記され今日一応西鶴の本姓は「平山」ということになっているが、「平山」姓は、この記録以外にほとんどでてこない。一方通常用いられている「井原」姓はこれまた何故に称したかも明確ではなく、母方の姓を名乗ったかともいわれている。

西鶴が大阪に生まれたことはたしかであるが、その生家がどのようなものであったか、これまたよくわかっていない。先に引いた「見聞談叢」に「有徳なるものなれるが、妻もはやく死し、一女あれども盲目、それも死せり。名跡を手代にゆづりて、僧にもならず、世間を自由にくらし、――」とあるから、かなりの町人の出であったらしい。また三十六歳で剃髪して「鑓屋町の草庵」に隠棲したことから生家もおそらくこの近辺であったろうと想像される。「鑓屋町」は、元和元年（一六一五）、大阪落城後の市街復興の折に、最初に伏見の町人を住まわせたところだという。彼の家が若しそこにあったとすれば、西鶴は大阪の近世商業都市として草創の地に生まれたことになり、後に彼が数々の町人、商人を主題にした作品を書いたのも、生粋、生えぬきの大阪町人の出ということから、いよいよ緊密の関係をもつものとなるが、今日ではまだ想像の域をでない。

俳諧師、浮世草子作者として、彼は「西鶴」以外に多くの号名を使っている。鶴永、西鵬、四千翁、二萬翁、松風軒、松寿軒、松魂軒等である。西鵬の号を使ったのは元禄元年（一六八八）から同四年（一九一）の間である。これは、同元年二月一日将軍綱吉の息女鶴姫が紀伊徳川家へ入輿することが決って、「鶴」字および「鶴紋」の使用を禁じた「鶴字法度」のためであった。ところが同四年鶴姫が病没し入輿が沙汰止みとなったので、再び西鶴号にもどったのである。

彼の一生を通観すると、㈠俳諧師時代（十五歳より四十歳まで）㈡浮世草子作者時代（四十一歳より没年まで）と区別するのが普通である。

俳諧師時代

俳諧は当時、謡、茶の湯などとともに上層町人の子弟には必須的教養であった。彼が俳諧の道に入ったのは、十五歳の頃らしい。（西鶴大矢数跋）。当時俳諧は松永貞徳（承応二年没）を祖とする貞門俳諧が全国を風靡し、「御傘」「油糟」「淀川」などが続々刊行されていた。富裕な町人の家に育ったと思われる西鶴が、まず少年期にその洗礼を受けたことは自然である。二十一歳の時には、すでに点者として他人の作に評点を加えるほどになっていた。（「俳諧石車」（元禄四年（一六九一）の記事による）

西鶴の始めて学んだと思われる貞門風の俳諧の特色は、中世的な和歌、連歌の世界を手本とし、その雰囲気を俳諧に盛り、作法も連歌の式目に準じたものであった。貞門の指導者が常々口にすることは「常に源氏物語、枕草子に親しめ、身賤しくともよき人（堂上歌人）の口まねをせよ」であって、彼等の意図するところは一に中世の幽玄美の模倣、追求であった。このような気風は、近世初期町人層の富力、および、社会に占める実質的な位置に比較して、教養の乏しさの自覚から来る一種の劣等感によるものであった。しかしやがて富裕町人層の基盤が確立し、さらに問屋商人、両替商人、あるいはさらに下層の商人までが文学芸術への関心を示すようになると、彼等の中にはもっと自分たちの気質に密着したものを求めようとした。たんなる堂上歌風への敬慕、讃美には飽きたらなくなったし、彼等の気概もそれを許さない。町人のエネルギー、卑俗さ、生活観をそのまま代弁するユーモア、力強さ、規矩の無視、哄笑などが徐々に求められてきた。

西鶴二十五歳、寛文六年（一六六六）始めて鶴永の俳号で、西村長愛子の編む「遠近集」に三句採られた。あたかもこの時期に、大阪天満宮連歌所宗匠、西山宗因が「談林俳諧」の旗印を掲げて、貞門風と変った俳風を樹立しようとした。談林俳諧はいうなれば貞門の裏返しであった。きわめて現実的で、漢語、俗語を自由に駆使し、十七音の形式をも無視して滑稽を求める。ここに俳諧は初めて、新興

町人層の日常生活をのびのびと自由に表現することができたのである。西鶴が談林に走ったのは当然であった。延宝七年（一六七九）刊「俳諧破邪顕正」に「当時宗因流を学ぶ弟子数多ある中に、ことさらすぐれて相見えしは江戸は不知（ら）ず大阪にて阿蘭陀（らんだ）西鶴」とあるように、彼は日ならずして談林俳諧のエースとなった。のみならず、談林中でも最先鋒で「おらんだ流」と称された。この言葉は三十二歳延宝元年（一六七三）に自ら挑んだ「生玉万句」に始めてみえる。「おらんだ」とは、国名を指すほかに当時「珍奇なもの」「愚にもつかぬもの」「常識を越えるもの」に対する蔑称、非難の意味として用いられていたらしい。当時の西鶴の俳風が容易に想像されるだろう。「生玉万句」が刊行されたその年の冬、彼はそれまで使っていた「鶴永」を改め「西鶴」と号した。（余談になるがこの年、現在の三越の前身、越後屋呉服店が日本橋駿河町に開店した）

延宝三年（一六七五）四月三日、二十五歳になる妻が幼児三人（一人は盲目の女子）を残して死んだ。哀悼、追善の意をもって同八日「明るより暮るまでに独吟千句、手向（たむけ）にも成なんと執筆も一人して」と、一日独吟千句を編み、「俳諧独吟千句」と名づけて刊行した。この巻末には大阪談林の俳人百五人から寄せられた追善発句が加えられている。妻の死をいたむ彼の気持もさることながら、そくざに百五人の句を集め得た彼の声望と、その裏づけともなるべき経済力をしのばせるものがある。

延宝五年（一六七七）冬、三十六歳を迎えた西鶴は、妻を失った傷心のなお癒えぬためか、剃髪して、店を縁者に譲り、鑓屋町の草庵に孤独を養う身となった。そしてこの年から有名な「矢数俳諧」を競（きそ）う。矢数俳諧とは、一定時間に速吟してその数の多寡で勝負を決するもので、談林風の特色の極点に達した一現象である。西鶴は同年五月二十五日大阪生玉本覚寺内で一日一夜独吟千六百句（一句の持時間五十秒）を吐き「西鶴俳諧大句数」と題して刊行した。しかしこれは同九月大和月松軒紀子の千八百句によって破られ、延宝七年（一六七九）さらにまた大淀三千風の二千八百句に抜かれた。西鶴はこの間に俳諧の友人達と幾つかの句集を刊行している。翌延宝八年（一六八〇）五月七日再び生玉に立った彼は一日一夜四千句（一句二十秒）の独吟を成し遂げ、天和元年（一六八一）「西鶴大矢数」として刊行した。

このような「早口」で句がたたまれてゆく場合には、一句一句の苦吟によってはとうてい為しうるものではない。あらかじめ一種の散文的連想を下図にし、それにしたがって、人生の諸相を次々と展開していくのでなければとてもこのような速吟は望めない。その結果として出来あがったものはある統一した散文詩風のものが構成される。「西鶴大矢数」が刊行された翌天和二年（一六八二）十月「好色一代男」の稿成り刊行されたのは、俳諧からの展開として必然的な到着点であった。彼は談林俳諧の限界を体験によ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

って知り、俳諧師としての彼を浮世草子作者としての彼の中に発展的に解消させたのであった。しかし彼は、貞享元年（一六八四）六月五日大阪住吉社頭で自らの記録に挑戦した。一昼夜二十四時間、そのうち飲食その他に二時間を省き正味二十二時間に二万三千五百句（一句二、三秒）をよみ通したのである。これが真実とすればまさに超人間的というべく、すさまじいばかりのバイタリティである。

○浮世草子の作者として

彼の作品を年代にしたがって羅列し、その後に主要な作品をたどってみよう。

天和二年（一六八二）「好色一代男」
貞享元年（一六八四）「諸艶大鑑（好色二代男）」
貞享二年（一六八五）「西鶴諸国ばなし」「椀久一世の物語」
貞享三年（一六八六）「好色五人女」「好色一代女」「本朝二十不孝」
貞享四年（一六八七）「男色大鑑」「懐硯」「武道伝来記」
元禄元年（一六八八）「日本永代蔵」「武家義理物語」「色里三所世帯」「新可笑記」「好色盛衰記」
元禄二年（一六八九）「本朝桜陰比事」「一目玉鉾」
元禄四年（一六九一）「嵐無常物語」
元禄五年（一六九二）「世間胸算用」
元禄六年（一六九三）「浮世栄花一代男」

遺稿として「西鶴置土産」「西鶴織留」「西鶴俗つれづれ」「西鶴文反古（万の文反古）」「西鶴名残の友」がある。

以上の諸作品は、内容によってほぼ㈠好色物㈡武家物㈢町人物㈣雑話物の四つに分類することができる。そしてこれが多少の出入はあるにしても彼の創作過程とほぼ一致している。

好色物

処女作「好色一代男」は別項に示すように主人公世之介の一生を通しての愛欲の遍歴である。続く「諸艶大鑑（好色二代男）」は「一代男」の如き統一性はなく、主人公世伝の登場するのは最初と最後のみで、他の三十八話は諸国遊女の評判記であり、評判記としての新しい型を示している。がいずれにしろ愛欲生活を男性側から扱ったものであった。

従来の日本文学にある恋愛観や愛欲は、万葉集や一部の説話集を除けば、多く愛欲の虚しさをうたいそれからの逃避諦観にかたむいた。消極的、否定的であり、うす暗く陰欝なものが多かった。その伝統的な観念は徳川幕藩体制下に入っても、男女七歳にして席を同じうしない厳しい道徳律を伴ってことに武士階級には忌避されるべきものとされたのである。だが近世初頭の新興町人の富力と気概は、外

国貿易への関心を閉された結果として、必然的に内部に欝積し、それの開放をどこかに求めた。その唯一の場所が遊里であった。遊里においては、第一に物を云うのは金銭、富力である。三都を中心とした各地の遊里が盛大さを競ったのはこの町人階級の力によって支えられたからであった。勿論金で購う愛情が主体ではあったが、人間の根源的な性欲の交換は、同時にそこに生身の人間の実存を感ぜしめたのであった。西鶴が町人なるが故に遊里に異常な関心をもち、全国各地のそれを博捜するに至ったのも一つの必然である。そして金銭を支配するものが男性であるが故に、彼等の行動は奔放で明るく、生気にあふれていた。一代男の世之介がそのまま西鶴ではないにしても、「俳諧独吟千句」などで妻の死を慟哭しているところなどからみて、西鶴自らもまた旺盛な生の享楽者であったに違いない。加えるにこの年前後に四十歳を迎えた西鶴はいわば男盛りの年齢でもあった。従来ともすれば否定的に、あるいはタブーとして扱われてきた愛欲性欲の問題に男性の立場から積極的な肯定的態度でのぞんだ「一代男」は、それ以前の仮名草子にはみられない、斬新なものとして世人を驚倒させたのであった。

同じ愛欲にしても男性と女性とでは自ら異る。「一代男」「諸艶大鑑」で男性中心に筆を進めた西鶴が、やがて女性の立場から「好色五人女」「好色一代女」を描いたのは当然のなり行きかも知れない。そして「五人女」がそれぞれ遊里とは無関係の一般の女性であったことも、当時の女性のあり方を示して興味ぶかい。封建道徳の重圧の下で女性の愛欲は一種の宿命的な暗さを荷っていた。「五人女」はただ一例を残して、みな自己の恋を全うするために自らの命を犠牲にしなければならなかった。それぞれが当時市中の有名な事件をモデルにしたことも、リアリティを一層強めるものとしている。「一代男」「二代男」にみられる朗笑はすでに影をひそめ、町人物、武家物、雑話物にみられる冷静な客観的描写の態度がみえはじめているのである。

きびしい倫理道徳の下に圧(おさ)えられているとはいえ、持って生れた異常な本能によってその重圧をはねのけ自己を生かすが、女性としての宿命からやがて自らも崩壊してゆかざるをえないのが、「好色一代女」の主人公の場合であった。貴族の娘に生れて、堅い武家奉公をしながらも、性欲の虜となり、次々と所と対手を変えて、ついには六十近く路上に色を売る最下層の女となり果てる無惨さが此処では語られている。このような異常な性生活を通じて、あり得べき人間の本能をえぐり出したのは一人西鶴のみであった。

芭蕉は西鶴を軽蔑した一人であった。「去来抄」の中に「或は人情を云ふとても今日のさかしきくまぐまを探り求め、西鶴が浅間しく下れる姿有り。」の言葉がみられる。これはとくに西鶴の作品のどれを指したのではないにしても、やはり芭蕉にとって一番目ざわりだったのは好色物で

あろう。彼が諸国に風雅のたよりをさぐって自然に没入し、夏炉冬扇の世界に沈潜していた時、西鶴の「一代男」は遊里遊所を廻って「そしらばそしれわんざくれ」の限りを尽したのであるから。芭蕉の批判は、同時に在来の幽玄、無常を旨とした文芸思潮或はそれを担った人々の西鶴に対するものでもあったろう。それ故にまた従来の文学が容易になしえなかった「好色」の世界を敢然と直視し、そこに生きる人間の姿をあるがままに描いた「好色物」は西鶴の多くの作品の中でも注目すべき部類といわねばならない。

「諸国ばなし」と武家物

「五人女」や「一代女」と並行しながら、西鶴は「一代男」のスタイルを発展させて新しい説話集の形式を開いた。これが「西鶴諸国ばなし」である。内容は別項にゆずる。「一代男」は周知のように世之介一代の好色遍歴譚であるが、同時に各地の珍談、奇話が世之介という媒介を通して語られているのであって、各篇はそのまま短篇小説の結構を持っている。この型を発展させたのが「西鶴諸国ばなし」である。その雑纂的な話の集成から一歩進んで、統一された主題、あるいは素材、または共通な社会の話のみを扱ったのが「男色大鑑」「本朝二十不孝」、武家物といわれる「武道伝来記」「武家義理物語」および「新可笑記」であった。(「男色大鑑」は好色物に入れる見方もあるが、いわゆる「一代男」――「一代女」とは方法、素材、テーマとも

に相当異り、ことに前半は武士の衆道、敵討を扱っているので、一応武家物――雑話物の範疇に入れることとする)

この時期すなわち貞享二年より元禄元年迄に西鶴は第二の自己の手法を確立した。それは前記の説話集的様式を押し進めたことと、「一代女」「五人女」にみられる事実の冷厳な観照をさらに前進させた客観的な描写態度とであった。西鶴は何故に武士階級に関心をもち、これら一連の作品を書き続けたか。見方はいろいろある。西鶴および出版元が、当時の知識人、読者人の大半を構成していた武士階級を浮世草子の読者たらしめようとしたことが一つ。町人の合理主義とは次元を異にした武士道のもつ、非合理性、エキセントリックな自己犠牲や、そこに生ずる精神美に町人たる彼が強い憧憬を感じたことも、その一つである。しかし彼の根本的態度は、「武家義理物語」の序の次の言葉に表わされていはしまいか。「それは人間の一心万人ともに替れる事なし。長剣ささせば武士。烏帽子かづけば神主。黒衣を着すれば出家。鍬を握れば百姓。手斧つかひて職人十露盤をきて商人をあらはせり。」すなわち武士もその他の階層の人間と本質的には同等である。この前提に立った場合に武士社会の持つ特有の倫理、気質、慣習はより明瞭に浮き彫りにされる。町人として育った西鶴が、封建社会の支配者であり権力者であった武士に関心をもち、そこに存在する種々相を描こうとしたのは彼の貪欲飽くことない作家魂の然らしむるところであった。

「武道伝来記」と「武家義理物語」にはそれぞれ違ったタイプの武士の類型が描かれている、前者は些細の事にも面目、意気地を立てねば済まぬ戦国武士のタイプであり、後者にはそのような武士気質が否定されて自己を棄てても義理に生きようとする武士――封建道徳に忠実たらんとする――タイプである。しかしこれは概観的にのみいい得ることであって、両書の特徴はしかし截然と区別できるわけではない。義理と意気地は等質的に両書の間を流れており、それがある時は敵討に赴かせ、また没我の義理にも生きさせるのである。だが結局西鶴にとって武家社会は、自らが呼吸する町人社会とは異質のものであり、大きな断層の存在することを認めざるを得なかった。つづいて書かれた「新可笑記」が各章の副題に「武士は人をたすくる一言の事」「武士は義理死世を惜しむ事」など全章すべて「武士――」と言葉を挙げているにもかかわらず、事実は武士は傍系的人物として副えられているにとどまったり、まったく関係のない公卿社会の事件を扱ったりしていることは、武家社会の素材の枯渇してきたこと、ないしは関心を失いはじめたことを物語っている。したがって「新可笑記」は内容的には、むしろ「西鶴諸国ばなし」や「懐硯」のように、雑話物に近いともいえよう。西鶴は「武家物」を描きつつ、今一度自らの周囲に立ちもどっていった。そこに「日本永代蔵」を始とする「町人物」の誕生をみるのである。

町人物

時代の経済的な概観は前に述べた。延宝、天和、貞享とすすんで、この間に多くの大商人が輩出した。最下層から身をおこして巨万の富を握るものも多かった。しかし元禄期に近づくと、商業資本は相変らず活発に膨脹しつづけたものの、それぞれの勢力分野が安定し、もはや全くの赤手空拳から一身代を起すことは極めて困難になっていた。西鶴が武家の社会を敵討、義理の面から追求した後、町人の経済生活に筆を転じた元禄初年は、あたかもこのような時期に当っている。

「好色物」においてもその根底には金銭、経済があったことはいう迄もない。「一代男」の生涯は、そのまま富裕商人であった生家と密接な関係をもっている。勘当されて生家の経済から見放されたからこそ、世之介は各地の名もない賤女との恋に憂き身をやつさねばならなかったし、遺産を譲りうけると、忽ちに三都の名妓を相手に歓をほしいままにすることができたのである。一方では遊里に足を踏み入れたのが因果の始まりで、大身代を蕩尽しつくす例もまのあたりに見ることができた。「日本永代蔵」はこのような元禄商人と金銭との関係を主として、その致富談を中心に描き出している。別項の作品解説の個所でも触れたが、此処にみられるのはたんなる致富談ではない。繰り返されるものは致富の困難さであり、それの克服の方法でもあっ

た。故に一種の教訓的性格も帯びているのである。「永代蔵」の中で述べているように当時「広い世の中でも三文と楽な儲け」ができるわけではなかった。利が利を生む世の中となっていたのである。経済が集中化され、資本が巨大になればなる程そこには階級脱落者、最下層にうごめく集団が形成される。「永代蔵」に四年遅れて元禄五年刊行された「世間胸算用」は一転して、これら最下層の人々の生態を描いたのであった。(元禄二年より四年までは、作品表に見るように「一目玉鉾」のような道中案内書、裁判記録の「本朝桜陰比事」または有名な若衆の死に取材した「嵐無常物語」などが刊行され、また死後出版された「西鶴織留」の草稿が二部作として書かれている。)

西鶴の死の前年に出た「世間胸算用」には「一代男」の朗かさも、「一代女」「五人女」の激しさも、「武道伝来記」の悲壮美も、「永代蔵」の格調のある説得的な態度もない。極めて淡々と筆を運んでいる。

副題「大晦日は一日千金」にみられるように、対象もただ大みそかの一日二十四時間だけに限定し、ことに下層階級の胸に迫る貧困を記すのに大部分を費している。例えば「平太郎殿」のように、年末節分の法話に寺に集る人々は、仏信心のために来ているのではなく、みながみな借金の言いわけに万策尽きはてて、寺に逃避所を見出した者ばかり、しかもその人々の草履まで盗んでゆこうとする人間がいる。仏も僧も救いようがないどんづまりの人間の描写はその筆致が淡々としているだけに、悲劇を通り越して、滑稽をさえ感じさせる不気味な暗さがある。また「奈良の庭竈」の鮹売りの八助は、鮹の八本の足を、七本、六本にして余りを街道の茶店に売る程の奸智にたけた男であったが、二十四、五年も奈良へ行商した挙句がついぞ銭五百持って年を越したことがなく、この些細、幼稚な悪事もが露見して食を放れてしまう。同じ章の素浪人は思いあまって強盗と出たものの、奈良への銀荷三、四十貫目を目の前にしながら、そのあまりの多さについに一物をも奪うことができない。(大商人にとっては高の知れた金額であろう)勿論こうした話には作者の小説的作為が盛られていることは考えねばならないが、文章表現の無作為とも思える平淡さが、かえって話そのものをリアルに、象徴的に描き出しており、ひしひしと迫るもののあるのをおぼえる。「世間胸算用」はその内容文体ともに遺稿の「西鶴置土産」と並んで西鶴の晩年の作風を代表するものであり、傑作の一つに数えられる。

「日本永代蔵」と「世間胸算用」刊行の間に、西鶴は「本朝町人鑑」と「世の人心」と題して「日本永代蔵」の続篇たるべき作品を準備していた。しかしこれは未完のまま一時中絶され、「胸算用」を先に刊行してしまった。「本朝町人鑑」と「世の人心」は没後、弟子の北条団水によって「西鶴織留」と題して刊行された。執筆順序からは、「織留」は「胸算用」に先行すべきものであるが、ここでは一

応刊行の順にしたがって、町人物の末尾に加えておく。

「織留」は、その前半たる「本朝町人鑑」が「日本永代蔵」の続篇で、町人の致富談を集めたものであるが、決して「永代蔵」の趣意がそのままに生かされているわけではない。「永代蔵」でも致富の困難さは説かれていたのであるが、それが一層消極的、保守的なものになって、述べられている。「永代蔵」で強調した才覚に対しては、かなり懐疑的になり、ただ一途に自己の分際を守って、現在の家産を守ることを尊重する。また一方では致富が才能、努力よりも慈悲、善根によって応報的に得られる「保津川のながれ山崎長者」のような話が多い。後半の「世の人心」はさまざまな階級の人間の折にふれての生態や感情を描いたもので、描写態度は極めて冷静、平淡であり、作者自身の感情の投影を殆んどみない。この二つの未完作品はやや晩年に傾いた作者の心境の変化を物語るものと云えよう。

雑話物

武家物の始めに「西鶴諸国ばなし」には触れたが、この範疇に入るものに「懐硯」「本朝二十不孝」「本朝桜陰比事」「西鶴俗つれづれ」「西鶴名残の友」等がある。これらはいずれも、「好色物」「武家物」「町人物」と並行して書かれたものであって、彼の生涯を追って作品を辿るこの文章の趣旨からはいささかずれるわけであるが、作品の性格をつかむ上からは一括した方が便利なので、この一項を設けることとした。

「諸国ばなし」の項で記したように、諸国の奇談、珍聞を集大成する形式は日本古典の一様式であるが、また西鶴の諸作品の底流ともなるものであった。「雑話物」は一見非個性的作品とみられるが、そこに西鶴一流の巧妙な話術と町人的な解釈が、それらを没個性から救って独特の雰囲気をかもしだしている。

貞享三年（一六八六）刊の「本朝二十不孝」は「二十四孝」の裏返しであって、極端な親不孝二十例を挙げたものである。「孝道」は「忠臣」と共に封建道徳の基幹となる道徳律であった。しかも人間的愛情を無視した絶対的な服従、一方的な拝跪が強要された。二十四孝もこれを啓蒙訓化するものとして盛に奨励されていた。しかし、孟宗の雪中の筍や郭巨の黄金の釜のように、合理主義現実主義に徹した町人層の生活理念からはあまりに遊離した空想的な話が多かった。西鶴は「二十不孝」で「孝をすすめるための一助」に書いたと一応ことわってはいるが、実はこの虚をついたものであった。この中で語られる「不孝」はまことにすさまじい限りと感ぜられるものがある。「今の都も世は借り物」の主人公笹六は隠居の父の財産を狙い「死一倍（死んだらその人の財産によって借りた金の倍払う約束）」で千両借りる。しかしこれは決して完全な虚構ではない。西鶴が序でいうようにこの世の中は「子としての道を尽すのが人の常だが、このような人間は稀で、悪人が多い」の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.